E-1　（個人発表　6 月 12 日(土)14:00～14:25　N313 教室）

アイヌ民族との協同による博物館展示

山崎幸治（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

本発表では、北海道（札幌市）においてアイヌ文化に関する博物館展示をおこなった事例をもとに、そこで得られた成果および文化人類学的課題について報告する。博物館展示は、同じものが展示される場合でも、その展示がおこなわれる場所や規模、携わる人々、そこでの関係性により、展示から発せられるメッセージが大きく異なってくる。本発表は、先住民族（アイヌ民族）と教育研究機関（北海道大学）が、大学博物館という場所において協同で展示をおこなった場合の一事例と位置づけられる。

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・博物館には、2500 点を超えるアイヌ民族の物質文化資料が所蔵されており、質、量ともに世界有数のコレクションのひとつであるといえる。2007 年度、これらのアイヌ民族資料の悉皆調査が終了し、広く活用されるための準備が整いつつある。いうまでもなく、コレクション・ヒストリー研究は重要であり、現在も進行中である。

近年、民族学博物館等に収蔵されている物質文化資料や古記録類が、先住民族自身による文化復興をおこなう際の情報源として活用される動向が認められる。このような動きは、北大植物園・博物館においても既に認められるが、一般市民に十分認知されているとは言い難い状況にあった。

このような状況を踏まえ、発表者は、アイヌ民族を含む一般市民へ向けた博物館企画展示「テエタシンリッ テクルコチ 先人の手あと 北大所蔵アイヌ資料―受けつぐ技―」を企画した。【開期：2009 年2 月1 日～3 月29 日，場所：北海道大学総合博物館 企画展示室，共催：北大アイヌ・先住民研究センター、北大総合博物館，協力：北大北方生物圏フィールド科学センター植物園】

本企画展示は、大きく二つのコンセプトのもとに企画された。ひとつは、先に述べた悉皆調査によって整備されてきた北大植物園・博物館のアイヌ民族資料を、今後より多くの人々、とりわけアイヌの人々による活用のための契機とすることである。もうひとつは、資料が活用される現場を通してアイヌ民族資料の現代的意義を探ることである。この２つのコンセプトを掲げた理由は、資料の歴史的背景、収集経緯を認識したうえで、博物館のあり方を見つめなおし、そこから今後の可能性を模索することが、これからの教育研究機関（北海道大学）と先住民族（アイヌ民族）が目指す方向性を示すことになると考えたからである。以上のコンセプトを具現化する方法として、本企画展では、現代のアイヌ工芸家へ、北大植物園・博物館所蔵のアイヌ民族資料の「複製」制作を提案し、そこでの感想や意見に耳を傾けること、そこでおこなわれた一連の行為を展示するという方法を採用した。

本企画展示のために組織された展示準備委員会は、上記のコンセプトを協同で鍛え上げることを含め、企画段階から参加いただけるアイヌ工芸家と大学側スタッフで構成された。いずれも今回の展示に関わる活動を「自らの学び」として明確に位置づけた方々である。展示準備委員会では、約一年をかけて、展示タイトル、レイアウト、展示手法、展示物の選別など準備作業のすべての過程を「協同」をモットーとして作業を進めた。

本展示の特徴としては、大きく三つ挙げることができる。第一の特徴は、「複製」自体を展示の中心として明確に位置づけ、その制作過程、制作に使用された道具類、メモ類なども合わせて展示したことである。第二の特徴は、動画という展示手法を駆使したことである。資料調査と複製作業の様子を中心とする動画コンテンツを、複製作品とともに展示することで、現代のアイヌ工芸家の息づかいが伝わるように努めた。第三の特徴は、アイヌ工芸家からのメッセージを最大限尊重しながら、同時に大学という教育研究機関からのメッセージも尊重していることである。

本企画展が、アイヌ民族が長く居住してきた「北海道」という場所で開催された点は重要である。なぜなら、海外をフィールドとする文化人類学研究では見えにくい課題、人類学者に求められている「実践」とは何かということについても多くの課題が浮かびあがったからである。本発表では、それらの課題についても報告をおこなう。

【 アイヌ、先住民族、博物館、協同、物質文化 】